

はじめに

本書の元となつたのは、二〇二一年度に六回に分けて開催されたオンライン・トーケイベント『海外から見た日本考古学の魅力』です。これは、日本考古学を研究している海外在住あるいは外国籍の日本在住の研究者が、それぞれが考える日本考古学の魅力を、日本国内の聴衆に向けて日本語で語る、という催し物でした。それぞれの熱い思いをつなぐという意味を込めて、リレー方式で研究者たちがバトンをつなぎ、合計一二名の方々からお話しをいただきました。

そもそもなぜ、「国際遺跡研究室」に勤務する私たちがこのような企画を立てたのか、その経緯を、私たちの活動内容と合わせて、まずは述べておきたいと思います。国際遺跡研究室は、奈文研やその他の関連機関が行う国際的な調査研究に関しての実施・調整・協力・情報収集を行うことを主たる責務としています。具体的には、カンボジア・アンコール遺跡群西トップ遺跡の調査修復事業や、カザフスタンやウズベキスタンの文化財関連機関などとの学術交流を現在盛んに進めており、それ以外にもこれまで多くの海外機関との共同事業を展開してきました。地球上の様々な国や地域に出かけていき、多種多様な文化遺産を見ることや、そこで活躍する専門家たちの話を聞いたり意見を交わしたりすることは、楽しくも重要な職務であり、私たちの仕事の大きな部分を占めていました。また、海外の専門家を日本にお招きする機会を通じて、普段見慣れたつもりでいた日本の文化財について新たな視点を得ることも、少なくありませんでした。

二〇二〇年の冬、そんな私たちの活動にとつての緊急事態が発生しました。新型コロナウイルスの世界的な流行です。これによつて、全地球的に、多くの人々の生活がガラリと変わつたことは間違いないと思ひますが、「国際」を冠する私たちの研究室にも、大きな変化が訪れました。全く海外に渡航せずに各種の「国際」交流事業を展開せざるを得ない、という事態になつたのです。感染拡大に歯止めがかからないまま時間ばかりが過ぎてゆき、私たち自身、これほど長い間日本国内に留まるということは、仕事を始めてから初めての経験でした。

しかし、できないことを夢見て悲嘆にくれてばかりいるわけにはいきません。与えられた環境の中で最善をつくし、目的に向けて任務を遂行することが、私たちの責務です。国内にとどまらざるを得ないという状況を逆手にとつて、むしろ国内に積極的に目を向けて、日本の文化財や考古学の魅力を改めて見つめ直したいと考えました。そうした思惑で改めて海外に目をやると、日本を訪問したくてウズウズしている、日本の考古学を愛する世界各地の研究者たちの存在が、否が応にも目に入ってきます。彼ら・彼らからは、日本での経験を懐かしみ、一刻も早い再訪を望む声を数多く聞きました。それぞれに、日本で見たい物、聞きたい話、行きたい場所、会いたい人々がいるのです。言い換えれば、実に多様な視点から、日本の考古学の魅力を発掘・発見し、それに魅了されている人たちなのです。

したがつて、私たち日本人が日本考古学の魅力を再発見していくうえで、彼ら・彼らこそは、最も教えを乞うべき存在と言えます。日本に閉じ込められたことで得られた私たちの気づきと、海外にいる彼ら・彼らの声から誕生したのが、オンライン・トーケイベント『海外から見た日本考古学の魅力』でした。実は、この企画は、最初からリレー形式にするつもりではありませんでした。計画の段階で、「日本語

で」「日本の聴衆に向けて」お話しいただける方々に、企画の相談をし始めたところ、瞬く間に賛同者が集まり、気が付くと通年のシリーズを開催できる運びとなっていたというのだが、舞台裏で起きていたことです。このような経緯でしたので、自然とお声がけしたのは、この企画の発案者である庄田とそれまでに何らかの関わりのあつた方々ということになります。個人的な付き合いの詳細についてはここで述べませんが、これだけ多くの方々からいただいたご縁に、改めて感謝申し上げる次第です。また、リレーの順番を決めるにあたり、海外における日本考古学の研究を長年牽引して来られたジーナ・バーンズさんを大トリとすることは心に決めていました。ご本人にも、紅白歌合戦を引き合いに出してご了承いただいたことは、心温まる思い出です。その他、リレー走者の方々のご都合もあつたものの、世代や所属、テーマなどを合わせることで、各回の特色をうまく出せた例もありました。

リレートークはすべて、オンライン会議ツール Zoom を用いたオンライン形式で行いましたが、より多くの参加希望者に対応するため、第二回目以降は YouTube での配信も行いました。全六回の合計で、延べ八〇〇名以上の方々が参加してくださいました。企画を通じて、参加者の皆さん一人ひとりが、いろいろな思いを分かち合いながら、それぞれに新たな発見をしていただけていたら、これに勝る喜びはあります。企画が、海外渡航の難しい状況下で、日本の文化財をめぐる海外との交流を深める場に少しでもなつていていたとすれば、本当に嬉しいことです。

そして本書を手にとつて下さった皆さんには、講演をもとに再構成されたそれぞれの個性的な文章をじっくりと読んでいただき、普段とは異なる視点から見た日本考古学の魅力を感じとつていただければと思います。

最後になりますが、講演をお引き受けいただいた演者の方々、そして大勢の参加者の皆様、出版にあた

つて多くのご協力をいただいたクバプロの皆様に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。ワンドアでエンチャントな日本考古学の世界へ、ようこそ！

『イベント開催の詳細』

第1回 二〇二一年五月一七日

サイモン・ケイナー（英國セインズベリー日本藝術研究所所長）

『奈良からノリッジへ・日本考古学への英國的まなざし』

マーク・ハドソン（ドイツマックス・プランク人類史科学研究所 研究員）

『宮古島長墓遺跡の調査からみた日本考古学』

第2回 二〇二一年七月三〇日

羽生淳子（米国カリフオルニア大学バークレー校教授）

『学際的研究からみた景観利用の歴史的連続性とその変化』

編者一同

マージヨリー・バージ（米国コロラド大学ボルダー校助教授）
『考古学的文学研究のために』

第3回 二〇二一年九月一七日

イローナ・バウシュ（オランダライデン大学講師）

『縄文社会、宗教と交換』

アマンダ・ゴメス（北海道大学博士課程）

『モノから人へ..考古学と地域社会の関係性』

第4回 二〇二一年一月一日

温品・ディアナ（ポルトガル里斯ボン大学博士課程）

『縄文貝塚の魅力..西ヨーロッパからの視点』

ブリッタ・シュタイン（ドイツマルティン・ルター大学ハレ・ヴィツテンベルク校講師）

『日本考古学の魅力..ドイツの考古学者の経験と印象』

第5回 二〇二二年一月一四日

ジヨセフ・ライアン（岡山大学大学院特任助教）

『鉄器研究から見た日本考古学』

スコット・ライオンズ（米国カリフォルニア大学バークレー校博士課程）

『分析が明かす昔の鍛冶』

第6回 二〇二二年三月九日

エンリコ・クレーマ（英国ケンブリッジ大学上級講師）

『時間と集落と人口の考古学』

ジーナ・バーンズ（英国ダーラム大学名誉教授）

『埴輪・勾玉・冠・直弧文の魅力』